





# 「令和」発祥の聖地 太宰府の天神さま

「初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す」  
奈良・平安時代に九州の政治の中心だった太宰府政庁跡（太宰府市）。長官だった歌人の大伴旅人が自邸で開いた「梅花の宴（730年、天平2年）」に合わせ、梅の花の歌の序文はつくられました。大宰府政庁跡周辺の坂本八幡神社や大宰府展示館などには多くの人が訪れ、「聖地巡礼」の雰囲気にも包まれています。  
**天神さまとして崇められた菅原道真公**  
道真公は5歳で和歌を、11歳で漢詩を詠み神童と称されました。若くして学者の最



菅原道真 承和12(845)年6月25日～延喜3(903)年2月25日

高位を極め、弓でも百発百中の腕前。順調に出世して右大臣に昇進した栄華の頂点で、左大臣藤原時平の策謀により、大宰府に突如左遷されることとなりました。  
京を離れる際、自宅の梅の木に別れの歌を詠まれました。

## 「令和」の地ゆかりの天神さま 『菅原道真公』

創作講談

新元号「令和」の出典は、日本最古の歌集「万葉集」にある梅花の歌三十二首の序文です。

「初春の令月にして、氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫す」  
奈良・平安時代に九州の政治の中心だった太宰府政庁跡（太宰府市）。長官だった歌人の大伴旅人が自邸で開いた「梅花の宴（730年、天平2年）」に合わせ、梅の花の歌の序文はつくられました。大宰府政庁跡周辺の坂本八幡神社や大宰府展示館などには多くの人が訪れ、「聖地巡礼」の雰囲気に包まれています。



太宰府天満宮  
太宰府天満宮は菅原道真公をお祀りする全国約12,000社ある神社の総本宮と称えられています。

「東風吹かば 匂ひおこせよ 梅の花  
あるじなしとて 春な忘れそ」  
この梅の木が道真公を追って二夜で大宰府へ飛んでいったという「飛梅伝説」が有名です。  
失意の中でも誠を尽くした道真は大宰府で病没。死後、無実が証明され「天神さま」と崇められるようになりました。

本道の道真公は一体どんな人物だったのでしようか。人並優れた文人政治家で、人民のためにあえて朝廷に苦言も呈された正義漢だったために左遷されてしまう…。  
そんな真実の道真公の姿に迫ります。

# 泉鏡花没後80年記念公演

創作講談

泉鏡花没後80年

## 『滝の白糸（義血侠血）2019』

### お馴染み芝居講談

初演は1984年。紅の師匠二代目神田山陽も裁判官役として出演した6人編成の芝居講談だったものが、今では紅一人芝居講談として定着しています。

明治6年に石川県金沢市で生まれた泉鏡花は17歳で金沢を出奔し、18歳の時に尾崎紅葉門下となるが、金沢の実家が火事で焼失し父も



泉鏡花 (いずみ きょうか)  
1873-1939 明治-昭和時代前期の小説家。  
明治6年11月4日生まれ。尾崎紅葉に師事。「夜行巡査」「外科室」で脚光をあびる。明治29年発表の「照葉（てりは）狂言」から幻想的でロマンにみちた独自の世界をきずいた。代表作に「高野聖（こうやひじり）」「婦（おんな）系図」「歌行灯（うたあんどん）」など。芸術院会員。昭和14年9月7日死去。67歳。石川県出身。北陸英和学校中退。本名は鏡太郎。

亡くなったために、金沢に帰らねばならなくなる。彼の才能を惜しんだ紅葉は、原稿を書き送るよう促し、21歳の時に書き送ったのが『義血侠血』。初稿は、女芸人の白糸が仕送りを約束することになる村越欣也が後に裁判官となり、白糸を裁く時に両目をついて「私の目に見えるのは、恩人の白糸の姿ではなく法の正義である」という筋でした。これを紅葉は惨すぎるとして手を入れ、読売新聞に連載。泉鏡花の名前が世に出ることになりました。  
村越欣也は、検事代理として登場し、被告の白糸に最初に尋問する役になっています。



壮絶な純愛物語!!

### 福岡紅塾 金印亭精鋭のリレー講談

関ヶ原、川中島に並ぶ日本三大合戦

## 『大原合戦～筑後川の戦い』

<大原合戦660周年>1359年、九州南北朝最大の合戦「大原合戦（大保原の戦）」は、筑後川をはさんで小郡で起きました。九州の拠点太宰府への進出を狙う南朝方と太宰府を守る北朝方。「太平記」では討ち死にかつ5400人以上に上るとあり、戦いの激しさを物語っています。

